岡山大学大学院社会文化科学研究科附属　文明動態学研究センター

Newsletter

Vol.03
APR.2020

Center for Research on the Dynamics of Civilizations

編集・発行：岡山大学大学院社会文化科学研究科附属文明動態学研究センター
発行日：2020 年 4 月 30 日

第 3 回 国際マヤシンポジウム開催

去る 12 月 13 日(金)、14 日(土)、15 日(日)の 3 日間、第 3 回国際マヤシンポジウム「異分野融合で見える最先端のマヤ考古学」が岡山大学津島キャンパスにおいて開催されました。文明動態学研究センターと名古屋大学高等研究院の共同主催で、おかやま観光コンベンション協会、岡山大学研究協力部、社会文化科学研究科など、学内学外の様々な関係各所から多大な後援、協力を得て、5 カ国 8 つの研究機関から発表者が集いました。日本各地から参加したマヤ考古学を志す学生や一般の聴講者など、3 日間で述べ 100 人以上を動員することができ、異分野融合研究や外国の歴史・考古学に対する興味、関心の高まりを感じることのできる非常に有意義な、中四国初の本格的な国際マヤ考古学会でした。

シンポジウム当日の様子

13 日は専門的な発表が 5 本行われました。名古屋大学の森島氏による講演では宇宙線ミューオンを用いたピラミッド透視プロジェクトの概要が説明され、金沢大学の中村氏と名古屋大学の市川氏はそれぞれコパン遺跡とチャルチュアパ遺跡における編年の研究を報告しました。コパンでは地上ライダー測量や地下トンネル三次元測量との融合研究が示され、チャルチュアパではベイズ統計による新たな編年案が提示されました。台湾中央研究院の飯塚氏はアジアと中央アメリカを横断する「緑の石」の研究を紹介し、茨城大学の青山氏はハンドヘルド蛍光X線分析計による黒曜石製石器の産地同定や石器使用痕分析による研究を紹介しました。

14 日も 5 本の研究発表が行われました。ミシシッピ大学のフレイワルド氏が安定同位体による移民研究について広くメソアメリカ全域から多くの事例を報告すると、ユカタン自治大学のティスラー氏は骨学的所見から古代マヤにおける人身供儀の実例を紹介しました。岡山大学の鈴木(本稿報告者)はグアテマラ南海岸地方における広域考古人骨研究を報告し、トレクサ社のメヒア氏は中南米諸国の埋蔵文化財行政の実情を広く紹介しました。チューレン大学のカヌート氏はペテン地方で行われた超広域の航空機レーザー測量の成果を報告し、従来的な古代マヤ文明像を覆すマヤ城塞都市の姿を紹介しました。

15 日はより一般的な内容にシフトし、3 本の講演が行われました。グアテマラ、デルバジェ大学のバリエントス氏はマヤ考古学 200 年の歴史を人類考古学の歴史と合わせて紹介し、サンバルトロ・シュルトゥン広域考古学プロジェクトのベルトラン氏は近年最大の発見の一つであるサンバルトロ遺跡の壁画について、保存へ向けた試みを紹介しました。メキシコ国立自治大学のクップラト氏はマヤ神聖文字の基本的な構造や読み方を一般向けに紹介し、その後、言語学、図像学と碑文学を融合した自らの最新研究を紹介しました。

シンポジウム参加者と楯築墳丘墓を視察

第2回BE-ARCHAEOワークショップ開催

岡山大学とトリノ大学(イタリア)を代表とする欧州の研究機関・企業との国際共同研究プロジェクト「BE-ARCHAEO(考古学を超えて)」が進んでいます。

岡山大学津島キャンパスにて2020年2月18日、19日、20日の3日間、イタリアから15名、ポルトガから3名の研究チームを迎えて、2回目のワークショップを開催しました。本センターとの連携協定を通して BE-ARCHAEO プロジェクトに参画している島根県古代文化センター、島根県立古代出雲歴史博物館からの参加者も含め、これまでのプロジェクトの成果を共有し、今後の進め方について議論しました。

ワークショップ当日の様子

鳶尾塚古墳の土壌サンプルを分析したトリノ大学の生物学者サミュエル・ヴォイロン氏は、含まれる微生物の種類から、古墳築造のための土砂の移動や、石室内の有機質物質の分解状況など、新しい視点と方法について発表しました。

全参加者での記念撮影

弥生・古墳時代のガラス玉研究を専門とする大賀克彦氏(国立大学法人奈良女子大学)にもご講演いただき、プロジェクトで進めている岡山県、島根県出土ガラス玉の分析状況を踏まえて活発な議論を行うことができました。

BE-ARCHAEO プロジェクトの成果は、2022 年秋に島根県立古代出雲歴史博物館で開催予定の出雲・吉備地域の弥生時代、古墳時代に関する特別展と合わせて展示し、広く一般に公開する予定です。

今回の岡山滞在中、プロジェクトの広報担当グループは古代出雲歴史博物館を訪問し、島根県職員の方々と展示会場の視察・打合せを行い、構想を練りました。

展示予定会場の様子

展示物配置の構想を練るための測量

視察後は博物館の敷地に接する出雲大社を案内していただき、鳥居から入り、手水舎、参拝作法を実践しました。

神有月に神が鎮まる東西十九社や、古代には 3 本の大木を鉄輪でまとめ高さ48mもあったというご本殿の宇豆柱の出土地点の印を実際に見て、その大きさに感銘を受けました。

古代出雲歴史博物館敷地に隣接する出雲大社

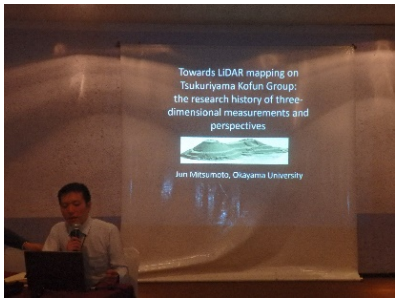
古代ロマン溢れる出雲での展示後は、イタリアのトリノ東洋美術館にてさらに縄文時代を加えた展示も予定されています。どうぞご期待ください。

新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」プロジェクト、メキシコ会議と国際フォーラムを開催

2019 年度より、岡山大学大学院社会文化科学研究科・松本直子教授を代表として、文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学―文明創出メカニズムの解明―」（2019 年度～2023 年度）のプロジェクトが始動しています。

本プロジェクトは、ヒトがいかに新環境に適応し、文明を発展させたか、そのメカニズムを探求することを目的としています。そのため、統合的人類史の視点から日本列島、アメリカ大陸、オセアニア地域の比較研究を行い、理論モデルを構築・検証することを目指します。本プロジェクトの性質上、研究対象地域の踏査・比較研究が重要であることから、定期的に現地研究者を加えた研究集会を現地で開催することを計画しています。

記念すべき第一回目の海外研究集会が、2020 年 2 月 27、28 日にメキシコで開催されました。同国最大の古代都市遺跡テオティワカンに隣接するホテルで行われた研究集会"Monuments, Art, and Human Body: Out of Eurasia"には、29 名の日本人研究者に加え、アメリカから 6 名の招待研究者が、現地メキシコから 15 名の研究者・大学院生が参加しました。本センターからは松本直子教授と光本順准教授が参加し、発表しました。



発表中の松本教授（上）と光本准教授（下）

研究集会を通じて、国内の研究者だけでなく、海外の研究者とも統合的人類史学の視点を共有し、多くの事例研究をもとに活発な議論を行いました。これらの議論は、今後の調査地域や学問領域を超えた共同研究につながるものとなりました。本会議の発表内容は、出版物として公開をする予定です。

メキシコ会議後の記念撮影

メキシコ会議翌日の 2 月 29 日には、国際フォーラム"Foro de Arqueología Cognitiva: Monumentos, Arte, y Cuerpo Humano, afuera de Eurasia. Monumentos y tumbas como lugar de memoria social"が首都メキシコシティにあるテンプロマヨール博物館で開催されました。国際フォーラムの開催は研究成果の現地への還元を目的としており、今回は専門家および一般市民約 80 人が参加しました。

フォーラムではまず本プロジェクトのメンバーが研究体制、理論、課題の紹介と、日本の古墳やアンデス調査の課題、そしてメソアメリカのモニュメントを認知考古学の観点からどう捉えるかといったことについて発表しました。続いてメソアメリカの主要遺跡で現在調査を進めている研究者が各地の事例研究を紹介しました。会場の関心は高く、質疑応答の際には、終了時間を大幅に延長するほど質問が寄せられ、盛況のうちに終えることができました。

国際フォーラムにて聞き入る聴衆

次回の海外研究集会は、グアムでの開催を予定しています。会議の日程や詳細については決まり次第、お知らせいたします。

※本プロジェクトの詳細や各メンバーの研究内容についてはウェブサイト（http://out-of-eurasia.jp/）でもご覧いただけます。

国立歴史民俗博物館と連携・協力協定を締結

岡山大学は 2 月 28 日、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館と連携・協力に関する協定を締結しました。

本協定は、岡山大学と国立歴史民俗博物館が、双方の教育研究活動の一層の充実を図るとともに、その成果の普及を促進することにより、学術の発展と人材の育成に寄与することを目的としています。

この日文学部会議室で行われた調印式では、今津勝紀大学院社会文化科学研究科教授（附属図書館長）が協定書の概要説明を行った後、久留島浩歴史民俗博物館長と槇野博史学長が協定書に署名しました。

槇野学長は、調印式で「本協定によりお互いの事業を連携させることで、教育・研究・社会貢献の充実を図るとともに、本学が全学を挙げて推進しているSDGs（持続可能な開発目標）達成に向けて、歴史文化資源の有効活用につなげたい」とあいさつしました。

協定書に署名をした槇野学長と久留島館長

調印式後に予定していた久留島館長による記念講演「歴史資料と向き合うー岡山県内の幕領関係史料から考えたことー」は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となりました。今後環境が整い次第改めてご案内いたします。

国立歴史民俗博物館は、我が国各地に伝えられた歴史文化遺産の保全・継承を通した歴史文化研究を実施する「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を展開し、①地域の歴史文化遺産のデータ化、それを管理公開する全国的なシステムの構築、②災害発生時の相互支援体制の構築、③安全な史料の取り扱い方法についての文理横断型の研究を推進しています。

文明動態学研究センターの地域歴史資料部門では、平成 30 年の西日本豪雨災害で被災した資料のレスキューに取り組み、それを基礎にした地域研究を展開しており、相互の連携をはかることで、研究・教育・社会貢献の充実をはかることが期待されます。今後は、被災資料の安定化とデータ化をすすめ、歴博のシステムを利用して公開することを予定しています。また全国ネットワークの構築により、歴史資料の保全に関する研究蓄積を相互に融通するとともに、それを学部や大学院での教育に反映させていきたいと考えています。

なお、文明動態学研究センターの考古学部門で展開されている、新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」プロジェクトには歴博のスタッフも加わっており、研究交流の活発化が期待されます。さらに、社会文化科学研究科が参加する卓越大学院プログラム（アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム）にも歴博は連携機関として加わっています。プログラムの活性化が期待できるでしょう。

メディア PICK UP

11 月7日、朝日新聞夕刊に岡山大学の URA 紹介記事が掲載されました。記事内では、岡山大学とトリノ大学(イタリア)を代表とする欧州の研究機関・企業との共同プロジェクト「BE-ARCHAEO(考古学を超えて)」についても取り上げられました。

12 月7日、朝日新聞で文明動態学研究センター今津勝紀セクションリーダーの著書「戸籍が語る古代の家族」（吉川弘文館）が紹介されました。

1月 16 日、山陽新聞に真備の豪雨で被災した屏風絵を岡山史料ネットが修復し、持ち主に返却された様子が掲載されました。

2 月 29 日、山陽新聞に岡山大学と国立歴史民俗博物館が、地域の歴史文化遺産のデータ化や災害時の文化財レスキューなどでの連携・協力を目的とした協定を結んだことについて掲載されました。